

小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の文化資源的活用に関する考察

小 泉 凡
(総合文化学科)

Research on the Utilization of Cultural Resources by Koizumi Yakumo (Lafcadio Hearn)

Bon KOIZUMI

キーワード：小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン)、文化資源的活用、地域教育、怪談、オープン・マインド・プロジェクト

Koizumi Yakumo (Lafcadio Hearn), Utilization of Cultural Resources, Regional Education, Ghost Stories, "The Open Mind of Lafcadio Hearn" Project

1. はじめに

近年、松江をはじめとする小泉八雲(ラフカディオ・ハーン/1850-1904)のゆかりの地で、文化資源としてその作品、精神性を地域活性化や文化創造活動に活かす動きが顕著にみられる。それは2010年に松江で開催された、「ハーンの神在月—全国・小泉八雲の会&ミュージアムの未来を考えるサミット—」の分科会で、研究・教育・文化活動・観光という4つの切り口から、小泉八雲の社会的活用について議論されたことが一つの契機になったと考えられる。つまり、従来は英文学や比較文学の研究者の研究対象、愛読者の興味の対象として存在してきた「小泉八雲」を、社会に拡大して活かす可能性を模索した会議だった。もちろん、全国的なふるさと創生の動きや、持続可能な共生社会の実現に向けた地域資源探求の動きとも深く関わっている。

筆者自身もいままでに松江を中心として、上記サミットをはじめ「松江ゴーストツアー」「松江怪談談義」「小泉八雲朗読ライブ」「造詣美術展オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」などの企画および実施に携わってきた経緯がある。

本稿では、松江を中心とした世界各地における小泉八雲の文化資源的活用に関する事例を考察しながら、その活用が、地域社会の文化創造や活性化に与える影響について考えてみたい。地域文化創造の営みとしての観光を探究している井口貢によれば、文化資源とはハード(建造物やまちなみなど)・ソフト(祭りや四季の行事など)・ヒューマン(歴史上の人物や地域に生きる人たち)によって構成される¹⁾。その分類によれば小泉八雲はヒューマン資源(人財)であり、つまり本稿では小泉八雲を例に地域におけるヒューマン資源の意義を考察することになる。

文化資源学会の設立趣意書によれば、文化資源学の目的は「文化資料体を新たな視点から新たな媒体によって再利用し、次代の文化基盤として活用する方法を研究すること」²⁾にあるとされている。本稿でも、その趣旨に沿って、文化を地域や社会を元気にする宝として再評価し、それを創造的に活用する行為を「文化資源的活用」と呼ぶことにしたい。

2. 八雲の五感力を地域教育に活かす

2004年、それは小泉八雲没後百年という節目の

年だった。発足した「小泉八雲100年祭実行委員会」の中で、地元紙の記者から「学会招聘とパフォーマンスだけでなく、未来の松江を担う子どもたちに、現代社会の中でも輝きを失わない小泉八雲の意味を継承する企画を！」という意見があり、それを実践したのが「子ども塾—スーパーヘルンさん講座—」だ。バーチャル体験の急増とともに、子どもたちの自然体験の不足を危惧する声が社会的に高まったのもちょうどその頃だった。そのような社会的ニーズも考慮しつつ、未来の松江を担う子どもたちに筆者が伝えなかったのは、八雲の五感力だった。

八雲は4歳までギリシャ人の母ローザに生まれた後、大叔母の庇護のもとアイルランド人の語り部キャサリン・コステロから日々怪談や妖精譚を聞き、ケルト口承文化の語りの中で開かれた耳が育成された。さらに、16歳での左眼失明が、五感を駆使して文化を観察する態度をいっそう強めた。松江の町についても、「米搗きの音」「洞光寺の鐘の音」「地藏堂の勤行」「物売りの声」「大橋の下駄の音」などを描出した。(「神々の国の首都」『知られぬ日本の面影』)「サウンドスケープ」という概念が1960年代にカナダの作曲家マリー・シェーファーによって提唱される70年以上前から、町の音を、地域文化の一翼を担う重要な要素として受け止め、観察していたからだ。八雲の作品が読み継がれる大きな理由は、彼があらゆる身体感覚を通して明治の日本をとらえたからだと言われている³⁾。

五感力が欠如しているということは、斎藤孝によれば「感覚を統合して現実をリアルなものとして感じ取る回路がうまく機能していないこと」で、現実感がなく他者や自分の存在感も希薄になり、さらには生きることに自信が持たなくなってしまうという⁴⁾。

以来、「子ども塾」では、「町の音」「蟬の声」「海辺の生活」「民話」「怪談」「虫の音」「人力車」「怪談屋敷」「まち歩き」「生物多様性」「松江八景」など、毎年、テーマと活動場所を変えて、思春期に入る小学校4年生から中学生を対象に、小泉八雲を通して五感を磨く教育実践として夏休みに毎年開催してきた。小泉八雲を学ぶのではなく、八雲が明治の松江で五感を研ぎ澄ませて観察した行為を現代の松

江で追体験することから、地域の自然や文化の魅力を発見しようという趣旨である。そこに八雲の文化資源的活用の意義を見出している。

八雲に関わる文化事業という位置づけから松江市観光文化課が事務局をつとめ、このプロジェクトに共感するメンバーで実行委員会を構成し実施している。そこには鳥根県内の小学校の教員、保護者、環境問題の専門家、スポーツや身体のインストラクター、オルガニスト、鳥根県立大学短期大学部の教員や学生などが加わり、筆者は塾長(委員長)をつとめている。また、予算が許す範囲で、毎回テーマにふさわしい特別講師を招いて子どもたちへ動機づけを行ってきた。

直近の一例を示すと、2015年度はテーマを「子どもヘルン八景」とした。中国伝来ながら日本には、博多八景、近江八景、横浜の金沢八景など、五感で美しいと感じる8つの風景で地域をたたえる伝統文化が定着している⁵⁾。その中には、晩鐘(夕暮れの寺の鐘)、夜雨(夜に降る雨の音や雰囲気)、晴嵐(晴れているのに山に立ち上る靄の美しさ)、夕照(夕陽の美)など五感で探した地域の美が詠み込まれている。そこで今回、参加者にそれぞれの五感で松江の美を発見してもらった。10名の子どもたちは八雲町のスタジオの神木、大庭町の神魂神社、洞光寺、月照寺、松江城を訪ね、中でも洞光寺では鐘つき体験、国宝松江城では日没時刻に天守閣からの夕陽を堪能した。この体験で五感に響いた風景を、本学の福井一尊准教授の指導で、五線譜に絵の具を使って自由に表現し、地図をつくって添付していった(写真1)。



写真1 2015年度の「子ども塾」最終日のまとめ作業

「子ども塾」の効果を数字で測ることは難しい。しかし、毎回実施する参加者のアンケートや記念誌『子ども塾スーパーヘルンさん講座の10年』⁶⁾に寄せられた文章から総合的に判断すると、「五感を使うことで地域の気づけなかった魅力を発見できた」「さらにそれを追及して見たくなくなった」という点に収斂できる。現に、「子ども塾」への参加がひとつのきっかけとなって本学の総合文化学科に入学した学生もいる。その一人であるKさんは「子ども塾」の印象について、「中でも『子育て幽霊』のお話は今も覚えています。そしてこれを機に、小泉八雲のこと、妖怪のことに興味をもつようになりました。(中略)五感をすべて使って、体全体で感じたことは、大人になっても忘れない宝物です」と回想する⁷⁾。その点では、「子ども塾」の実践は、広い意味の「地域教育」であり、教育を通じた「地域おこし」であるといえるだろう。

井口貢は地域の観光を考える上で必要な哲学は「地域の知(恵)を愛する行為」だと指摘するが⁸⁾、その点ではこのプロジェクトは観光教育の一環ととらえることも可能だと思われる。

3. 怪談を活かす

1) 経緯と現状

筆者は城下町松江に伝わる豊富な怪談を資源化する試みを2006年からNPO法人松江ツーリズム研究会と連携し手がけている。松江の怪談の多くが、すでに小泉八雲の『知られぬ日本の面影』⁹⁾の中に再話、紹介されたという点では、これも八雲の文化資源の活用と呼ぶことができる。

2005年にアイルランドの首都ダブリンで「ダブリン・ゴースト・バスダブリンのとり憑かれた聖堂の謎解き」を体験したが、そのアイデアと充実した着地型観光プランの実施内容に刺激され、松江でも2006年8月に試験的に怪談ツアーを実施した。その後、2008年度の国土交通省「ニューツーリズム創出・流通促進事業」の助成金を得て、同年8月から「松江ゴーストツアー」を開始した。なお着地型観光プランとは、従来のマストツーリズムから、少人数・目的志向・体験やローカリティー（地方色）重視の新しい旅行形態（オルタナティブツーリズム）への変化に伴い、到着地（地方）のNPOや商店街などで考案された体験重視の旅行プランを言う。

実施にあたり語り部を公募し、24名の中から4名の語り部を選任し、小泉八雲研究・郷土史研究・口承文芸研究・語りの技法・ホスピタリティという5つの観点で研修を実施した。ガイドの質の保証は耳で楽しむ夜の文化探訪ツアーではきわめて重要な意味をもつからだ。

内容は、松江城内のギリギリ井戸・城山稲荷神社・月照寺・清光院・大雄寺を語り部の怪談を聞きながら2時間半の徒歩で巡るもので（カラコロコース）、それに松江の懐石料理と筆者の講演の入った（ヘルンコース）を設定した。3月から11月にかけての土曜日を中心に実施し、その後も表1の示す通り集客は堅調だ。参加者の県内外の比率をみると、県内者中心から次第に県外者中心へと移行し、近年ではこのツアーの開催日にあわせて山陰旅行を計画する観光客が増加している。NPO法人松江ツーリズム研究会が過去に実施したアンケート結果によれば、県外者からは「予想以上に充実した内容に満足した」、県内者からは「地域の再発見が興味深い」という感想に集約される。ささやかではあるが、観光振興への寄与とともに、地域への愛着と矜持の醸成という効果をもたらしているのではないだろうか。

なお、ヘルンコースは2014年度で終了し、カラコロコースも徒歩の時間が長すぎるといったアンケートのフィードバックから、一部にタクシーを導入し、城山稲荷神社は割愛するコースで現在は行っている。なお、松江ゴーストツアー実施の経緯や参考にした先進地事例の報告については、拙文「文化資源として生かす小泉八雲—松江における3つの実践から—」（『文化資源学』11号、2013年7月、文化資源学会）に記したので詳述は割愛したい。

表1 松江ゴーストツアー開催状況

年度	実施回数	年度別参加者数	1ツアーの平均参加者数	県外者(外国人を含む)の占める率
2008	19回	475人	25.0人	33%
2009	39回	627人	16.1人	46%
2010	41回	727人	17.7人	40%
2011	41回	584人	14.2人	74%
2012	33回	424人	12.8人	64%
2013	39回	646人	16.6人	82%
2014	29回	519人	17.9人	74%
2015*	19回	295人	15.5人	64%
平均	260回	4297人	16.5人	60%

注 NPO法人松江ツーリズム研究会提供のデータにより作成
*2015年度のデータは、9月30日時点での集計による。

2) 松江ゴーストツアーの波及

松江ゴーストツアーは当初、日本で唯一の「怪談」をテーマとする夜の文化探訪ツアーであった。その後、滋賀県彦根市でもゴーストツアーの取組が開始された。筆者の知人で滋賀大学経済学部の実鍋晶子教授が中心となり、彦根市在住の有志で「空の旅人舎」を結成し、公益財団法人彦根観光協会が窓口となって集客を行う。ほぼ滋賀県北東部全域を視野に入れ、バスや船を使用し、宿泊も伴い、テーマにふさわしいエキスパートを講師に招いた大がかりな文化探訪ツアーとして年に数回実施している。すでに、「黒い鳥の章」「石田三成の章」「青い龍の章」「『古事記』の章」「ゆーれーの章」「白い狐の章」「ゆーれーの第二章」「天狗現るの章」「『オコナイ』の章」「『鬼も残滓を巡る』の章」「『天女と菅原道真』の章」の11回が実施され、次第に知名度も高まっている。「目に見えないモノを見ることができるかもしれない旅をしませんか？現世（うつしよ）と幽世（かくりよ）の狭間、湖東・湖北の伝承を追いかけて文化遺産を巡るTourに出かけませんか？」というキャッチ・フレーズが示す通り、彦根を中心とする湖東・湖北地方の知られざる異界資源の探訪を目的としている。

松江ゴーストツアーと「異界資源の探訪」という目的こそ共通するが、実施内容・実施形態は大きく異なっている。1回のツアーへの参加者はバスの定員もあり約25名だが、ツアー中の講演への参加者も含めると、のべ320名が参加したことになる。

さらに、小泉八雲が晩年に6回の夏を過ごした静岡県焼津市にある焼津小泉八雲記念館（焼津市教育委員会）でも2013年から、年に一度ゴーストツアーを実施している。筆者は同事業には企画及び当日の講師として直接関わっている。地元の子どもたちに焼津の怪談や八雲のエピソードを語り継ぐ地域教育の一環として行うもので、第1回目は「夏休み子ども講座 ゴーストツアー」として9か所の伝承地を4時間ほどかけて徒歩で廻った。第2回目以降は「ゴーストツアー イン ヤイツ」として同様の手法・内容で実施している。ただ、夏休み中も多忙な子どもたちの事情もあり参加者数の伸び悩みが課題となっている。

さらに2015年9月20日には、鳥取県琴浦町の琴ノ浦まちおこしの会が琴浦ミステリーツアーを企画・実施し、地元NPO関係者ら18名が参加した（写真2）。これは、町内に伝わる「子育て幽霊」「馬子と山姥」「七尋女房」などの怪談を、同会のメンバーが、八雲がかつて滞在した中井旅館で語り、その後現地をマイクロバスで訪問するという内容だ。10月3日には琴浦町内の小学生を対象に同ツアーを実施し、赤碕小学校の5・6年生を中心に27名が参加している。今後とも、町内の無形の文化資源を継承するという観点から、小学生を対象としたミステリーツアーを継続する予定だという。



写真2 琴浦ミステリーツアー（2015年9月20日）の出發式

上記はいずれも松江ゴーストツアーの影響を受けて成立した着地型観光プランで、筆者も企画段階から関与している事例である。彦根市・焼津市・琴浦町でのゴーストツアーの展開は、従来、十分な評価がなされていなかった地域の超自然的伝承やそのゆかりの場所をクローズアップし、地域住民や訪問者に地域文化の面白さと継承の必要性を開示する役割は十分担っているといえよう。

なお、妖怪伝承の地域資源化について、徳島県三好市・広島県三次市・鳥取県境港市などの事例を中心に調査研究を継続的に行っている市川寛也は、妖怪伝承が「まちづくりの素材として転用されることで純粋な一次資料としての民俗文化が変質することは免れないが、様々な活用を通して伝承の場が保たれているという事実は注視すべきであろう」と述べ、資源化による民俗文化の継承の意義を説いている¹⁰⁾。上述の通り、怪談の資源化についても同様の意義を見出すことができる。

4. 「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」プロジェクトの展開と影響

ギリシャ人の八雲の愛読者でアート・ディーラーのタキス・エフスタシウ氏の提案により、2009年より「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」のテーマで造形美術展や国際シンポジウムを行っている。発端は2008年にエフスタシウ氏が、八雲の精神性の根幹を「オープン・マインド」ととらえ、民族・宗教紛争の拡大する21世紀に必要な思考として、世界中の人がわかりやすいアートを通して広めようと提案したことによる。

2009年にはギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで第1回目の造形美術展が開催され、翌、2010年は松江城の天守閣で、2011年はニューヨークの日本クラブで、2012年にはニューオーリンズのテュレーン大学で、主催者と作品を変えて実施された。いずれも小泉八雲と関わりの深い土地である。

2014年には八雲の生誕地ギリシャ・レフカダで、あらためて八雲の「オープン・マインド」とは何かを検証する国際シンポジウムを企画し、ギリシャ・アイルランド・マルティニーク・日本出身の9名のパネリストにより発表とパネル・ディスカッションを実施した。これに際して筆者も、八雲の「オープン・マインド」が培われた経緯について基調講演を行い、このプロジェクトの実行委員長もつとめた(写真3)。



写真3 国際シンポジウム「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン—西洋から東洋へ—」での基調講演

同シンポジウムでは、八雲の境界的帰属意識、世界市民的アイデンティティが指摘されるとともに、

異文化を受容できる開かれた心を子どもたちに伝える必要性が確認された。

ギリシャのレフカダとコルフでは、2006年から松江で実施してきた、同市出身の俳優佐野史郎氏とギタリスト山本恭司氏による「小泉八雲朗読ライブ—望郷」の公演も行い、来場者600名によるスタンディング・オベーションで大きな反響を得た。朗読ライブ自体も松江の文化資源（芸術資源）としてとらえることができる。

レフカダ市ではこのプロジェクトの実施にあわせて、レフカダ文化センター（旧市役所の建物）の2室を提供し、「ラフカディオ・ハーン史料室」(Lafcadio Hearn Historical Center) を2014年7月4日にオープンさせた。これはヨーロッパ初の小泉八雲記念館である。日本国内の松江・熊本・焼津・新宿の4か所の八雲ゆかりの地の自治体と松江市に拠点を置く八雲会ははじめ熊本から仙台に至る各地の小泉八雲研究・顕彰団体、および八雲関係の資料を保有し研究活動が盛んな大学（熊本大学・島根大学・島根県立大学・富山大学・早稲田大学）で実行委員会を組織し、八雲の遺愛の品や原稿のレプリカ、関連写真など17品目を寄贈し、アテネ在住の研究者や愛好家が約400キロ離れたレフカダにたびたび足を運んで史料室を完成させた。この展示施設の作り方は、地元の行政や企業の資金での設立とは異なり、レフカダ市から部屋の提供のみを受け、日本の自治体や団体からコンテンツを寄贈し、ボランティア労働によってできあがるという、文化資源化にふさわしい成立の仕方といえるだろう。



写真4 レフカダにオープンした「ラフカディオ・ハーン史料室」を訪れる子どもたち

その後「ラフカディオ・ハーン史料室」にはギリシャ各地から子どもたちが遠足や社会科見学で次々と訪問しており、日本文化や小泉八雲を学ぶワークショップも開催されている。現地の報告によれば、2015年10月時点で、すでに2000人の子どもたちが訪問しているという(写真4)。「オープン・マインド・プロジェクト」の主催者としては、前述の国際シンポジウムの成果が思いがけず早期に実現したことに喜びを感じている。

ギリシャでの「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」プロジェクトの地域への影響として次の点があげられる。レフカダでは、八雲の生家への説明版の設置、レフカダ湾に面した詩人公園における八雲の胸像の設置などが行われてきたが、必ずしも文化資源として活用されてきたとは言えず、レフカダやギリシャにおける八雲の知名度も決して高いとは言えなかった。ところが、2009年にアテネで造形美術展が行われたのをきっかけにマスコミが反応して以来、しだいに注目が集まり、作品のギリシャ語訳や八雲に関わるイベントがギリシャ各地で開催されるようになった¹¹⁾。その潮流によってレフカダでは、国際シンポジウムの誘致に積極的な姿勢を示し、史料室もごく自然な流れの中で開館できたといえる。つまりレフカダ市の場合、八雲に対する社会的評価を察知し、地域資源として再認識したといえるだろう。

シンポジウムや朗読ライブに参加した地元レフカダ市民は、「夏休みの最高の思い出ができた」「レフカダ生まれの作家の知られざる魅力に驚いた」といった感想を寄せており、地域のヒューマン資源としての認識と地域住民の矜持を高めたことがうかがえる。またこの事業に参加してレフカダを訪問した西林万寿夫駐ギリシャ・日本大使、同じく駐ギリシャ・アイルランド大使館のルーク・フィーニー次席、世界各地の八雲研究者とレフカダの自治体・住民との接触が、八雲を媒介とする新しい文化交流のきっかけを導いたといえよう。

現に、その翌年の2015年10月10日にアイルランド・トラモアのコーストガードセンターで小泉八雲企画展示のオープニング・セレモニーが催された際、

スピーチを行ったレフカダハーン史料室のキュレーターをつとめたマリア・ゲネットァリユー氏は、今後とも世界各地で行われることが予想される八雲関係の講演・シンポジウム等の内容のデータベース化と共有について提案を行った。また「オープン・マインド・プロジェクト」のプロデューサーの小泉祥子氏からはトラモア・レフカダ・焼津・松江などがハブ・シティとして相互の情報共有と文化交流を促進しようという提案がなされている。

そもそもこのプロジェクトの中核をなす造形美術展が、一般的な美術館が企画する予算を投じた企画展示とはコンセプトが異なり、ウェブ上でアーティストに呼びかけ作品は原則寄贈してもらうというやり方だ。作品の質の保証は難しくなるが、地元の学芸員や専門家の意見を参考に、一定レベルと判断された作品を展示する。アート作品だけでなく、ハーンの人生や、オープン・マインドがうかがえる引用文をパネル展示することで、その精神性を伝えることをめざした。単なる地元作家の顕彰ではなく、八雲ゆかりの各地にとって、地域の文化資源の発掘と創出である。

なお、このプロジェクトは、2015年10月にはアイルランドで内容を変えて実施されているが、それについては次章で言及する。

5. アイルランドにおける活用の動き

1) 小泉八雲庭園の構想

アイルランドは小泉八雲の祖国で、2歳から10年余りの幼少年期を過ごした地である。八雲の国籍がイギリスなのは、当時アイルランドが独立国でなかったという事情によるもので¹²⁾、本来ならアイルランド人というべきである。ところが、八雲が4歳の時に母がギリシャに帰国し、その後大叔母サラ・ブレナンの庇護のもとでイギリスやフランスで教育を受け、さらに大叔母の破産により19歳でアメリカに移住せざるを得なくなった。八雲のアイルランドへの複雑でネガティブな感情に加え、アメリカからさらに日本へと渡り、文筆をなした奇妙な漂泊者というイメージが、アイルランド人作家というカテゴリから除外される要因をつくったのだと想像される。

アイルランド最大の書店であるダブリンの「イーンズ」にも彼の著書は1冊も置かれていないことを2012年に確認している。

八雲は1997年に、ダブリン作家記念館³⁾に殿堂入りを果たしたものの、廊下にかろうじて写真が飾られたに過ぎない。換言すれば、アイルランドは文筆家の宝庫だという事情があるからだ。『ガリバー旅行記』のジョサン・スウィフトに始まり、20世紀を代表する詩人ウィリアム・バトラー・イエーツやブラム・ストーカー、オスカー・ワイルド、バーナード・ショー、サミュエル・ベケット、シェイマス・ヒーニーなど圧巻であり、このうち4人はノーベル文学賞受賞者である。かつて、エア・リングス（アイルランド国営航空）のエコノミークラスのシートには、緑の無地に白字でそんな錚々たるアイリッシュ・ライターたちの自筆のサインが刺繍されていた。まさに、文学の担い手こそがアイルランドが誇る、国の資源と認知されてきたことがわかる。

そのようなアイリッシュ・ライターの範疇からはずれた小泉八雲が、ウォーターフォード州トラモアに住む歴史家アグネス・エイルワード氏により、地域の文化資源になりうる作家として注目されたのは2012年のことである。同氏はアイルランド観光省勤務時代に元駐日大使のショーン・ローナン氏から小泉八雲の魅力について聞き、トラモアと八雲の関わりに関心を抱いていた。

トラモアはダブリンから約300キロ南にあるケルト海に面した保養地で、サラ・ブレナンはこの海を愛し3件の別荘を所有していた。それゆえ八雲も夏場をここで過ごすことが多く、泳ぎを覚え、乳母キャサリン・コストロから妖精譚や怪談を聞いて心を躍らせた場所だ¹⁴⁾。海と超自然の物語への共感を終生強く持ち続けた八雲にとって、この小さな海辺の町での体験は大きな意味を持っていた。トラモアにおいても八雲への認識は高いとはいえ、顕彰の記憶としてはトラモア公立図書館にジョン・コール作の八雲のブロンズ像が設置されているくらいだ。2012年に筆者が18年ぶりに同地を訪問したことも引き金になり、「小泉八雲庭園」の構想が持ち上がった。

エイルワード氏は、眼下に海を臨む1ヘクタール

のウォーターフォード市が管理する土地に注目し、ここに「小泉八雲庭園」をつくる計画を打ち出した。トラモア開発トラスト（Tramore Development Trust）という既存のNPO組織を活用し、その下部組織として「ラフカディオ・ハーン・ガーデン・プロジェクト」（以下、ガーデン・プロジェクトと略す）を組織し、本格的な計画検討に入った。日本万国博覧会記念基金やアイルランド政府の支援を得て、わずか2年半ほどで完成にこぎつけた。

2) 庭園の完成と今後の展望

2015年6月26日には開園式が開催された（写真5）。開園式でエイルワード氏は「ハーンと同じように時間の経過と共に、より日本らしくなっていくでしょう」と語り、来賓の渥美千尋駐アイルランド・日本大使は「日愛両国の交流の深化をもたらす庭になる」と述べた。最後に「ハーンが、ヨーロッパと日本のユニークなヒューマン・コネクションとなり、この庭園が、二国間を結ぶ架け橋になる」と同じく来賓で訪れたブレンダン・ハウリン公共支出・改革担当大臣が結んだ。筆者も、八雲がかけがえない体験をした場所に庭ができた喜びと、この庭がトラモアの文化資源として活かされることへの期待を述べた。



写真5 小泉八雲庭園の開園式（2015年6月26日）

そこで筆者を含む一同が認識したのは、これは海外によくある日本庭園ではないことだ。エイルワード氏の構想に基づき、アイルランド人庭師マーティン・カレン氏のほとぼしる自由な想像力が作り上げた八雲の精神を感じる庭である。京都の庭師、楠見

一紀氏が3度通って、日本人と石についてアドバイスも行っている。

つまりこの庭園は八雲の人生を9つの庭で表現するもので、それぞれにテーマがある。「旅の始まりートラモアとの縁」「船出：未来の予感」「アメリカへの旅」「ギリシャの庭」「日本への到着」「せせらぎの庭」「森林」「平和と調和の庭」「生き神様の伝説」だ。もともとあった湧水を「コイズミ・ファウンテン」として庭のシンボルに位置づけ、その流れが下に池をつくる。島根半島の霊場、加賀藩戸も猫の額ほどの大きさで再現してある。全体的には樹木に囲まれた回遊式の日本的な庭園とも見えるが、部分においてはギリシャやアメリカ南部、イギリスを象徴する庭もつくられており、八雲の人生における多様な異文化体験を表現している。そして八雲の開かれた精神性（オープン・マインド）をトラモアの地から発信しようというコンセプトが感じられるのだ（写真6）。



写真6 小泉八雲庭園の中心部

オープン後の庭園管理はガーデン・プロジェクトのメンバーが行っている。開園する木曜日から日曜日までは、CEスキーム¹⁵⁾の造園に関わった10名の訓練生が交替でガイドを行い、庭園入口の受付業務はトラモアの市民ボランティアである。なお、オフシーズンとなる11月から2月までは庭園を一時閉園する。来年度には庭園入口付近のヴィクトリア庭園内に小屋を作り、職員を雇用して常駐させる計画や、近い将来、ビジターセンターを設置する計画もある。その青写真もすでにできており、ハーンの展示施設とカフェを併設した建物をつくる予定だ。2015年10

月10日には、庭園内にて松江市から寄贈されたハーンのレリーフ¹⁶⁾の贈呈式が行われ、筆者も出席した。このレリーフもビジターセンター完成時にはそちらに移動させる計画である。

6月26日のオープン以来、アイルランド国内を中心に、イギリス・ドイツ・スウェーデン・アメリカ・日本などから、9月末までの3か月間で約4000人の入場者があったという。また、結婚式の写真をこの庭園で撮影したいという希望も複数持ち込まれた。アイルランドでも稀有なマリリゾート地であるトラモアの新たな観光・文化資源として今後の活用が期待される。

6. おわりにー結びにかえて

本稿では、小泉八雲の文化資源的活用の事例として、ここ数十年間で筆者が携わってきた「子ども塾」「ゴーストツアー」「オープンマインド・オブ・ラフカディオ・ハーン・プロジェクト」「アイルランドの小泉八雲庭園」の4つの事例を通して、それぞれの成立の経緯と文化資源の意味について言及してきた。

もちろん、多くの作家について、古より研究活動はもとよりその顕彰活動がさまざまな形で行われてきた。小泉八雲に関していえば、顕彰会である八雲会（第一次）¹⁷⁾は1915年に成立しており、2015年には創立100年を迎えた。一時断絶して、新たな八雲会（第二次）が成立してからも、すでに50年が経過している。年1回の機関誌の発行や八雲作品の英語による暗唱大会である「ヘルンをたたえる青少年スピーチコンテスト」、「小泉八雲感想文・作詞」のコンクール、節目の年の記念事業など松江市と連携して顕彰活動を継続的に行っている。

また、松江に小泉八雲記念館が建設されたのは1933年のことであり、オープンからすでに80年余りの歳月を経ている。この間、国内はもとより世界から訪れる多くの訪問者に八雲文学や松江の魅力を紹介してきた。八雲来日百年祭が松江で開催された1990年には年間入館者数が297,000人を数え、さらに1993年には336,000人に達した。しかし、その後は減少に転じ、ここ数年は10万人程度に留まっている。

本稿で紹介した4つの事例は、こういった永年の八雲顕彰の動きとは無関係に成立したわけではないが、趣を異にする点もある。それは、子ども塾の場合は、地域教育、未来の地域文化の担い手の育成、ゴーストツアーは着地型観光プラン、オープン・マインド・プロジェクトや小泉八雲庭園は八雲の精神性の発信と芸術文化の創造、地域資源の創造という点に目的があるからだ。それぞれに八雲ワールドの普及という意味合いも含まれてはいるが、決してそれが最終目的ではないということだ。

文化資源の活用とは言い換えれば、本来とは違う新しい意味づけをして活かす、二次的活用ということである。冒頭にも触れたように、文学作品や作家は、愛読者がじっくりとその作品を鑑賞したり、研究者が研究対象として作品論や作家論を展開するというのが本来の活用法だと考えられる。地域資源の創造や観光といった社会的な活用を目的としている点において、従来の文学的活用や顕彰活動との差異が見出されるのである。

本稿で取り上げた事例は、いずれも将来的な展開が期待されるものばかりである。今後も継続的に実践と考察を行っていきたい。

注

1) 井口貢「文化政策としての観光」（井口貢編『観光学事始め—「脱観光的」観光のスズメ—』所収）法律文化社、2015年、19頁。

2) 文化資源学会設立趣意書（2002年6月12日採択）<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/CR/acr/about.html>、最終アクセス日2015年10月19日。

3) 代表的な例として、西成彦は、「ひとびとが雑音として抑圧してしまった音に敢えて耳を傾け、耳本来の受動性にすべてをゆだねること。ラフカディオ・ハーンの耳が、明治中期の日本で14年かけておこなったフィールドワークの中で最もかけがえのない部分は、この聴覚を介した作業であった」と述べ、さらに「耳なし芳一」を例に挙げつつ、八雲は「口承文芸の本質的特徴を、推理力によってではなく、身体感覚を通してつかみとった」ことを指摘している（『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店、1993年、191-192頁）。

4) 齊藤孝・山下柚実『「五感力」を育てる』中公新書ラクレ、V頁、2002年。

5) 日本の八景は、中国湖南省で北宋時代末期に成立した瀟湘八景が手本にして成立したといわれる（『国史大辞典』第7巻、吉川弘文館、1986年）。

6) 本誌では、筆者を含む17名の参加者や関係者が文章を寄せている（スーパーヘルンさん講座実行委員会編集・発行、2014年3月）。

7) スーパーヘルンさん講座実行委員会編『子ども塾スーパーヘルンさん講座の10年』（2014年）

8) 井口貢「愛知・愛地のための観光を求めて」（井口貢編『観光学事始め—「脱観光的」観光のスズメ—』所収）法律文化社、2015年、187頁。

9) 原題は *Glimpses of Unfamiliar Japan*。八雲のルポルタージュ紀行の代表作とされる。1894年刊。

10) 市川寛也「地域社会における妖怪観の形成と継承—徳島県三好市山城町の事例から—」『文化資源学』第11号、2013年、136頁。

11) たとえば、以下のような動きがみられた。2011年9月にはマラソン市における東日本大震災復興応援のための被災地写真展（筆者が写真提供）と小泉八雲の津波関連作品の紹介、2013年にはアテネ市内の図書館での八雲作品展及びギリシャ銀行ギャラリーにてマリア・ゲネツァリユー氏による八雲作品のカリグラフィ展、同年9月にはオナシス財団により八雲作品“The Fountain of Youth”（若返りの泉）のアニメ制作と放映、2014年にはテティ・ソルー氏により *A Japanese Miscellany*（『日本雑記』）、*Kotto*（『骨董』）、*Kwaidan*（『怪談』）のギリシャ語訳の刊行、同年4月にはラジオ局ベトン・セブンによる小泉八雲の特別番組の放送、同年4月から年末までコルフ島のアジア美術館で小泉八雲の企画展の開催、同年6月と9月にはレフカダで地域住民を対象とした小泉八雲に関するミニシンポジウムなどが行われた。

12) アイルランドのイギリスからの独立は1949年である。

13) 同館は、1991年、ダブリンのパネルスクエアにオープンしたミュージアムで、アイルランド文

学の全貌がうかがえる。作家別の展示コーナーには原稿、書簡、著作などが展示されている。

14) 八雲は1901年9月にアイルランドの詩人、ウィリアム・バトラー・イェーツに「しかし45年前、私は心にひびわれがないにらしい少年でした。ダブリンのアップパーリーソン通りに住み、私には妖精譚や怪談を教えてくれたコナハト出身の乳母がいました。だから私はアイルランドの事物を愛すべきだし、またじっさい愛しているのです」(拙訳)と書き送っている。

15) Community Employment Schemeのこと。長期間失業した人たちに対し、地域内での雇用の確保をめざすプログラムである。

16) 日本人彫刻家・倉沢実作で、同一のレリーフがすでに松江市立城北小学校の図書館内に設置されている。

17) 第一次八雲会は、桑原洋次郎、太田臺之丞、野津静一郎などが発起人となり成立した。2015年7月4日には、松江市総合文化センターで八雲会創立100年記念講演会・シンポジウム「八雲の記憶、百年の継承」が開催された。

参考文献

木下直之「人が資源を口にする時」『文化資源学』第1号、2002年。

小泉 凡「文化資源として生かす小泉八雲—松江における3つの実践から—」『文化資源学』第11号、2013年3月。

小泉 凡・真野啓子「『地域と子ども』に関する実践的研究」『しまね地域共生センター紀要』創刊準備号、2014年4月。

小泉 凡「文化資源としての怪談」『ご縁の国しまね観光コンベンションin松江<資料集>』島根県立大学短期大学部松江キャンパスしまね地域共生センター、2014年6月。

小泉 凡「文化資源としてのひと」(井口貢編『観光学事始め—「脱観光的」観光のススメ—』所収)法律文化社、2015年。

小泉 凡「アイルランドだより—文化資源としての『小泉八雲庭園』の誕生—」『のんびり雲』第9号、島根県立大学短期大学部松江キャンパス総合文化学科、2015年。

(受稿 平成27年11月9日, 受理 平成27年12月24日)